

『鉢かづき』の恋

——御巫本との比較による御伽文庫本の読みと特徴(二)——

富田 成美

御伽草子『鉢かづき』は、市古貞次氏によつて「公家小説」の「恋愛談」に分類されながらも、従来の研究では、伝本研究、「鉢・箱」の意味、長谷観音の靈驗、昔話や類例物語との比較による「継子物語」としての位相、近世絵本への展開などが重視されてきた。これらでは、作品がもつ恋物語としての性格には、あまり言及されていない。しかし、作品構成のうえでは、後半の大半を費やして、「鉢かづき」と男主人公との恋が描かれる。そこで、本稿では、文芸性の面から、作品の恋物語としての興趣に着目したい。

『鉢かづき』の伝本は、大多数が「御伽文庫本」とほぼ同一の内容と類似の本文をもつ。それは流布本系統の諸本である。しかし、わずかではあるが、流布本系とは大きく本文と内容を異にする伝本も存在する。古くは御巫清勇氏旧蔵の奈良絵本である。近年京都・鳥原の角屋保存会所蔵本など、いくつかの同系統の奈良絵本が発見された。御巫本系統と言われるこれらの諸本は、それぞれ異同をもちながらも、ひじょうに近い本文を有している。そ

のため、同一の祖本の存在が推定されている。⁵⁾ 両系統の本文成立年代の前後関係については、現在のところ、「申し子」譚や「入水」譚の位置、伝本数の少なさなどから、御巫本系統の方が後出と考えられている。⁶⁾ また、流布本系統と御巫本系統を対比したときに、後者の特徴とする点は、都や貴族階級への志向が強いことと、観音の靈驗譚の性格が作品を通して見られることと言われる。⁷⁾ これに異論はないが、恋の場面も、両系統では違いが大きいと思われる。本稿では、恋の場面に限って、両系統を比較してみたい。その際両系統の成立や影響の關係に重点を置くのではなく、『鉢かづき』という作品の、異なる二つの本文として、両系統を均等な位置で比較し、表現から何が読みとれるかを検討したい。そのうえで、御伽文庫本『鉢かづき』の恋の表象の特徴を考えたい。したがって、作品の成立事情、観音靈驗譚の意義づけ、『鉢かづき』諸本での御巫本系統の位置、御巫本諸本間の関係や各本の特徴などは、もちろん重要な問題であるが、それらは今後の研究課題としたい。

なお、恋の場面は、男主人公が「鉢かづき」を湯殿で見初めるところから、「嫁くらべ」を勝ち抜いて正妻の座を得るまでにわたる。紙幅の関係上、今回は二人の逢瀬が実現し、契りが深まるところまでを論じることとする。また、使用する本文は、流布本系統には、通行本である御伽文庫本（以下、御伽本と略称）を用いる。御巫本系統では、京都大学総合人間学部図書館所蔵本が「御巫本系統の本文を最もよく保存している」と言われるが、この本は上冊を欠いている。恋の場面は下冊に集中しているが、「鉢かづき」の美貌の認識など、上冊にも恋に関わる部分は存在する。上下冊が揃う御巫本と角屋本では、後者の方がよい本文と言われるが、角屋本は恋の表象に関わる部分に、いくつかの不備が見られる。御巫本は「独自異文の数是最も多い」が、それも「大きく文意に影響するような異文」ではない。したがって、御巫本を用いることとする。本書の本文は平仮名で書かれているが、考察の便のために、論考での人名は漢字で表記する。

一、男主人公との出会い

「鉢かづき」の恋は、彼女が「三位中将」（御伽本。御巫本では「関白」）邸で、「湯殿の湯沸し」として働いているときに、主家の子息（御伽本では「宰相」、御巫本では「中将」）に出会うことから始まる。しかし、その出会いは一様ではない。御伽本では次のように描かれる。

御兄たちも殿上も、御湯殿へ入らせ給へども、かの御曹司ばかり残らせ給ひ、さよ更けてはるかになりて、ひとり湯殿へ入らせ給ふ。

ここでは、理由は明確ではないが、「宰相」の通常とは異なる時間の入浴が、二人の出会ひの契機になったことが、明確に示される。そこで「鉢かづき」の「やさしく聞こえける」声を耳にし、行水を差し出す「手足の美しさ、尋常氣に」見えたことを、「世に不思議におぼしめし」、「宰相」は湯殿の世話を命じる。

一方御巫本では、「ちやくし、ちうしやうとの、このはちかつきを、御らんして、よにあひくしく、めつらしさに、おほしめし」とある。出会いの状況や時間性は明確にならない。御伽本の方が、ストーリー展開のうえでは、説得性があると言えよう。

そして、御伽本の「宰相」は、湯殿に奉仕する「鉢かづき」を見て、次のように思う。

河内国は狭しいへども、いかほどの人をも見てあれども、かほどにもの弱く、愛敬世にすぐれ、美しき人はいまだ見ず、一年花の都へ上りし時、御室の院の花見のありし時、貴賤群集して門前に市をなすれども、その時にもこの鉢かづきほどの人はなし。いかに思ふとも此人を見捨てがたくや思はれる。

「宰相」は一目で「鉢かづき」との恋に陥る。それも、「声」や「手足のはずれ」の美しさから、「もの弱さ」「愛敬」を見抜き、「鉢かづき」に都人以上の美質を感じたうえでの恋であった。

それでは、「宰相」はどうして「鉢かづき」の美質を知ることができたのであろうか。御伽本では、「鉢かづき」に美を感じたのは、「宰相」だけではない。「鉢かづき」が放浪の末に出会った「里人」は、その姿を見て、「久しき鉢が変化して、鉢かづいて化ける」と言う一方で、「たとへ化物にてもあれ、手足のはずれの美しさよ」と、手足の美を認識している。また、「湯殿の奉行」は、「かの鉢かづきは、頭こそ人には似ず、もの言ふ声色、笑ひ口、手足のはずれの美しさは、これに疾くから住ませ給ふ御女房衆も究めてこれには劣りなり」と、「宰相」が感じたものと同質の美を、「鉢かづき」に見ている。また、「鉢かづき」の外見も、「奉行」が「頭を見れば朦々として、口より下は見ゆれども、鼻より上は見えもせず」と言うように、一部は現れている。しかし、「奉行」は、「鉢かづき」に「近づきてかの人と契らばや」とは思つても、その異様な外見のために、「傍輩衆にも笑はれ、なか／＼はづかしや」と思い、世間体のために近づくことができなかった。「宰相」だけが外見を度外視することができた。その理由は具体的には書かれていない。乳母「冷泉」が認識するように、「宰相」の性格は、「さならぬことさへ色深く物はちをし給ひて、おぼろけごとまでもつつましげなるみたち」であつた。通常ならば「鉢かづき」に思いをかけることはない。しかし、それを可能にしたものが、「宰相」自身で後に説明されるように、「さきの世に御身と契深くして」尽きない「業因」であつたと考えられる。

一方御伽本では、「中将」は、「御らんし」ただけの「鉢かづき」

を、「あひ／＼」と思う。「鉢かづき」の美貌は、辻に捨てられて以来、都人に知られていた。「鉢かづき」の異形を憎んだ継母は、「人をかたらひて」継子を「きやうへのほせ、四てうのつし」に捨てさせる。そこで「鉢かづき」は、「きせん上下の、なんによ」に、「うちうつふき」見られ、「いろしろく、めのうちあさやかに、かみかたち、まみ、くちつきにいたり、うつくしき、によし」と認識される。そして、都人の「やさしき」者に憐れまれて、庇護を受けていた。また、「閑白」の邸に召されたときも、女房衆によつて、「つねの人にすくれ、めのうち、あさやかに、いろしろく、てつき、かみのかゝり、あしつき、つまもとまでも、た、人のこには、あらず」と、評されている。したがって、「閑白」の子である「中将」も、その外見の美については聞き知つていたと考えることができる。そのため、実見した愛らしさを「めつらしく」感じたと考えられる。

御伽本と御伽本では、男女の出会いにはこのような相違がある。恋が芽生える契機としては、御伽本のほうが合理性があろう。しかし、「宰相」が「鉢かづき」に強調するように、御伽本は「業因」「縁」による運命の出会いとして描かれている。「鉢」を被つた異相で卑賤の女と貴公子との出会いが、今後どのように発展していくのか、読者に伝奇物語としての興味を起こさせるためには、御伽本の因縁による出会いは、説得性をもつと言えよう。

二、恋の進展(1)——「宰相」の口説き

御伽本と異なり、御巫本では、「中将」は一目で「鉢かづき」を恋したわけではない。「鉢かづき」に興味を抱いた後の恋の経緯は、次のように描かれる。

しほのひるまの、つれく〜と、はちかつきを、御ゆとのに
めして、こしかた、ゆくすゑを、御物かたりある、その、ち、
よにたくひなく、おほしめし、日をかさねて、御ゆとのにめ
しける、いまは中しやう殿、日のくれゆくをよろこひ、ちや
うたいに、めされける。

最初は珍しさから、徒然を慰める「御物かたり」の相手とした。その後目を重ねるにつれて、「中将」の思いは深まり、今は「ちやうたいにめす」ようになる。御巫本では、男女が契りを結ぶまでは、一定の時間を経ている。そのなかで関係が深まっていく。しかし、ここには、兩人の心情の変化や揺らぎは、まったく描かれていない。また、「中将」が「鉢かづき」を「よにたくひなく、おほしめ」す理由も不明である。

御伽本では、「鉢かづき」と「宰相」の恋の進展は、作品の見せ場の一つとなっている。「宰相」は初めから「鉢かづき」を「見捨てがたくや思」い、「思ひそめにし紅の、色は移るふことなりと、君とわが中変らじ」と誓う。それは最初から「千秋の松に契りをはるかにかけ、松の浦の亀に久しく結ばれける」と評され

るものであった。御伽本の「鉢かづき」はひじょうに修辭を重視している¹⁶⁾ので、これは祝言性に満ちた文飾のための措置とも言えよう。しかし、身分差がはなはだしい二人の関係は、一夜の儚い契りで終わっても、何ら不思議はない。それが「千秋の松」や「松の浦の亀」という「長寿」を象徴する事物によって表現されているところに、その関係の永続性が予知されているのではないか。

以後、二人の恋の経緯が、歌語・雅語を駆使した美文によって綴られていく。「宰相」の恋は、すなおに受け入れられたのではない。「鉢かづき」は「軒端の梅に鶯の、まだ離れぬ風情」で、突然の展開に躊躇して、返事さえできない有様であった。そこで「宰相」は、重ねて「蜂かづき」を口説く。それは「ひき捨てられし琴の音の、よそにひく手もあるやらん」と、「ふみ重なる方」の有無を尋ねるところから始まる。「蜂かづき」の外見と、「湯殿の湯沸し」という身分を考えると、他の男性の存在を想定するのは、不自然なように思われる。しかし、関係を結ぶ前に「よその男」の存在を確かめるのは、恋物語のパターンの一つでもある。たとえば「小男の草子」(天理図書館蔵、室町末期写絵巻)では、「小男」が清水で見初めた「女房」に贈った文のなかには、「霞の下桜花、わたつみの、横切る雲の」という謎言葉があった。これは「女房」によつて、「霞の下桜花とは、横切る雲とは、男のあるやらんとや」と解かれる。御伽文庫本「物くさ太郎」では、「辻盗り」の末に探し当てた「女房」の邸で、供された果物を謎

に見立てて、「太郎」は梨を、「梨をたびたるは、われは男もなしといふ心」と解釈する。「宰相」の問いかけも、これらの方法に倣った措置と考えられる。

それに対して、「蜂かづき」は、まだまだ恋に未熟であった。「妹背の川の中だちに、よしや悪しやを知ら」ないために、思ひ人について聞かれたことを恥ずかしく思う。「蜂かづき」の答えの中心は、「調べの糸みな切れて、よそに引く手」がないことではなかった。「なみの立居に悲しきは、むなく別れし母のこと」と、亡き母への恋しさを訴え、「いつまで命ながらへて、あらぬうき世に墨染の、色にもならぬ怨めしき」と、死に後れた我が身を嘆く。この段階の「蜂かづき」は、交野の母の墓前で願ったように、母と「同じ蓮の縁となり、心安くあるべき」ことを求め続けていたと考えられる。

「宰相」はそれを「げにも理」と考え、次のように論ず。

有為転変の世の中に、生まれあひぬるはかなさよ。憂きは報いと知らずして、神や仏を怨みつつ、明し暮して過すなり。御身も、先の世に野辺の若木の枝を折り、思ひし中をおし隔て、人に嘆きをせさせつる、報ひのほどのことありて、親にも早くおくれつつ、いまだいとけなき心に、ものを思い寝の涙床せく風情なり。

「宰相」は「鉢かづき」の今の不遇を、「先の世」の「報ひ」と言う。「有為転変の世の中」の道理によって、現在の幸不幸が決まるという思想は、御伽草子に一般的に見られる。また、「二十

の境界まで、定むる妻」がなかった自分を、「宰相」は次のように言う。

先の世に御身と契り深くして、その業因の尽きねばこそ、めぐりめぐりとにかくに、今ここにおはすらん。世にいくしき人なれど、縁なき方へは目もゆかず、御身に縁があればこそ、かくまで深く思はるれ。

ここでは、「世にいくしき人」ではない「鉢かづき」に思いをかけたことが、「先の世」の尽きない「業因」や「縁」の結果であると説明されている。最初に「鉢かづき」と対面したときに、都人のなかにも「この鉢かづきほどの人はなし」と感じた理由が、ここで明確にされている。しかも、「宰相」の思ひは、因縁論や無常観だけに終始するものではない。「宰相」は二人の仲について、次のように明言する。

鯨の寄る島、虎臥す野辺、千尋の底、五道輪廻のあなたなる、六道四生のこなたなる、妹背の川の水上の、涅槃の岸は変わるとも、君と我が中変わらじ。

仏教では、「五道輪廻」「六道四生」という衆生の苦界から脱して、「涅槃」の境地に入ることを、究極最大の目的とする。「涅槃」の世界は、すべての煩惱の束縛から脱した、永遠不変の安らぎの境地である。恋の煩惱は、そこにいたることを妨げる大きな要因の一つとされる。同時代の文芸では、次のように記される。

たれ踏み初めて恋の道、巷に人の迷ふらん。(謡曲『恋重荷』)

重荷といふも思ひなり、浅間の煙あさましの身や、衆合地獄の重き苦しみ。(同)

われは邪淫の業深き、思ひの煙起ち居だに、安からざりし報ひの罪の、乱るる心いと迫めて、獄卒阿防羅利の、笞の数の際もなく、打てや打てやと報ひの砧。(謡曲『砧』)

それ、恋路に迷ひし人は……妹背の中の文もあり……恋ひそめしみづからが、衰ひはてたる有様、譬へん方もなき心なり。(御伽文庫本『小町草紙』)

一旦の色にふけて、暗き夜の闇をはらさざらんことの悲しさよ。(仮名字『露殿物語 下』)

しかし、「宰相」は、「五道輪廻」「六道四生」という迷いの世界の彼方に「妹背の川」があり、その「水上」が「涅槃の岸」であると言う。「妹背」の関係を「涅槃」に由来するものと捉える。さらに、「涅槃の岸は変はるとも、君とわが中変はらじ」と、悟りの世界である「涅槃」も「変はる」ものであり、その絶対性よりも、自分たちの関係の方が不動で強固であると訴える。作者の知識教養の限界の結果かも知れないが、ここでは仏教語は、本来の意味を失っている。「宰相」の思ひの強さを例証するために、意味を逆転させた「方便¹⁹」として、恋を肯定するために用いられている。

三、恋の進展(2)——「鉢かづき」の受容

それでも、このような「宰相」の思ひに、「鉢かづき」はすなおに従ったのではない。確かに二人の関係の深まりに時間を要した御巫本とは異なり、「君の仰せの強きまま、思はぬながらなびきそめ、その夜はここに節竹(臥した)」と、言い寄られたその夜に契りを結んでしまう。しかし、「鉢かづき」の心は、「末いかならんわが思ひ、知られぬその先に、足に任せて出でばや」と、悲しみにくれる。「わが思ひ」とは、契りの印に「黄楊の枕と横笛」を与えられた際の思いと同じものである。「鉢かづき」は「いとど恥づかしさは、やるかたもなし」と感じる。その理由は、「あるにかひなき有様にて、見えぬことの恥づかしさ」であった。「人のやうにも」ない鉢を被った姿で愛されることが、「宰相」の意に従えない原因であった。ところが「宰相」は、嘆く「鉢かづき」の風情を、「もの弱く、恥づかしげにてそばみたる、顔の愛敬のいつくしく……不思議におぼしめし」、「この鉢を取りのけて、十五夜の月のごとくに見るよしもがな」と、返って愛着を増す。

ところで、「鉢かづき」が「黄楊の枕と横笛」を与えられたのは、初夜の契りの際ではない。「昼も折々通ひ」とあるところから、一定期間関係が続いた後と思われる。その間に「宰相」の思ひは、日暮れを「住吉の根さしそめにし姫小松、千代待つよりも、

なほ久しく」と思うほどに募っていった。一方で「鉢かづき」は、枕と笛の置き所がなく、「持ちわづらひて」いた。ところが、夜が明けて、人々に責められながら湯を沸かす「鉢かづき」は、「苦しきは折り焚く柴の夕煙恋しき方へなどなびくらん」と詠じる。これは「宰相」を慕う恋歌である。

異様な外見を意に介さない熱心な求愛に、「鉢かづき」の心がなぜなびいたのかは、具体的には記されていない。ただ「黄楊の枕と横笛」が意味するものは、「宰相殿の鉢かづきに対する愛の表現……宰相殿の魂（心）そのもの」である。これらの品物は、「愛しあう男女の心と心を強く結びつける機能を果たしている」と言われる。「黄楊」が「（愛の心や来訪を）告げる」に通じるだけではない。「枕」は「供寝」を示す道具であり、「横笛」の竹の「節」は、「臥し」に通じる。二人の愛情の行為の具現物である。これらを手にすることは、「宰相殿の魂（心）」を手にすることでもある。「鉢かづき」はそれによって、「持ちわづらひ」ながらも、「宰相」に心を開いていったのではないか。

「湯殿の奉行」の挿話が「鉢かづき」の詠歌の後に置かれているのも、「鉢かづき」の変化と無関係ではない。「奉行」は「鉢かづき」の「声色」や「手足のはづれ」の美に気づいて、思いをかけた。しかし、「宰相」のように、「もの弱く、愛敬世にすぐれた内面の美質は感知できなかった。そのため、「傍輩衆」を憚って、契りを断念した。その心情は「理なり」と評される。このことは逆に、「宰相」が、「鉢かづき」にとって、特別の存在である

ことを示す。また、「宰相」自身が、隠された真実を見抜くという、世間の常識を超越した美質を有していることも表す。「鉢かづき」は「枕」と「笛」という形で、特別な存在の特別な美質を与えられたとも言える。それが「鉢かづき」の心を開かせたのではないか。

これ以後、「鉢かづき」は「宰相」に傾斜していく。「宰相」を待ちながら、「かたみの枕と横笛」を持って、「君来んと黄楊の枕や横笛のなど節多き契りなるらん」と詠じる。「あるにかひなき有様」を嘆いていた身が、ここでは契りの短さを恨むようになった。「宰相」は「幾千代と臥し添ひて見ん呉竹の契りは絶えじ黄楊の枕に」と応じる。短い契りに対して、永遠の契りを約束する返歌である。御伽本では、この唱和の前に、「鉢かづき」の歌が六首置かれる。それらは皆単独詠であり、ここで初めて恋歌の応酬が行われる。二人の気もちが完全に結びついた証左と言えよう。そして、契りは深くなり、「鉢かづき」は「宰相」の来訪が遅れると、「おぼつかなく思ひて」、「人待ちて上の空のみながむれば露けき袖に月ぞ宿れる」と詠むまでになる。待つ恋の焦燥感を詠んだこの歌は、「鉢かづき」の心が積極的に「宰相」を求めていることを示している。「鉢かづき」は「宰相」との恋によって、このように変貌した。

「鉢かづき」と「宰相」の恋は、御伽本では簡略に描かれるにすぎないが、御伽本ではかなりの紙幅を費やして、綿密に展開する。御巫本の「中将」は最初から「鉢かづき」の美貌を承知して

いた。しかし、御伽本の「宰相」はそうではない。美貌の貴公子が、「業因」と「縁」に引かれて、醜く卑賤の女性の隠された美質を知り、熱心な求愛によって女性の心を開き、相愛の関係となる。その過程が、歌語や雅語を多用した雅な文体で綴られる。その美麗さと伝奇的な興趣が、恋物語として、作品の見せ場の一つを作っている。(続)

注

- (1) 『中世小説の研究』(一九五五年／東京大学出版会)。
 (2) 主要なものについては、拙稿「鉢かづき」の母子像——「鉢」に見る「絆」——(『日本文学』47巻9号／一九九八年九月／日本文学協会)の注に載せた。岡田啓助氏の諸論は、同氏「鉢かづき研究」(二〇〇二年／おうふう)に再録されている。そのほか、伝本研究以外では、松原秀江氏「御伽草子『はちかづき』の草双紙への展開——西村屋興八版を中心に——」(『近世文芸』37号／一九八二年十一月／日本近世文学会、同氏「薄雪物語と御伽草子・飯名草子」一九九七年／和泉書院に再録)、竹内康子氏「御伽草子研究——鉢かづき」における「笑い」について——(『山口女子大国文』12号／一九九七年2月／山口県立大学国語国文学会)、河村全二氏「鉢かづき」の「鉢」(北畠典生博士古稀記念論文集「日本仏教文化論叢下」／一九九八年／永田文昌堂)、阿部真理子氏「御伽

草子」を読む(3)——姥皮の力・鉢の力——(『笹』21号／二〇〇〇年十二月／笹短歌会)などがある。

- (3) 松本隆信氏「室町時代現存本簡明目録」(奈良絵本国際研究会議編『御伽草子の世界』一九八二年／三省堂、神田龍身・西沢正史氏編『中世王朝物語・御伽草子事典』二〇〇二年／勉誠社、に再録)によると、「御伽文庫本」に代表されるA系統の本文をもつ伝本は、四十一本が確認されている。

- (4) 角屋保存会所蔵本(秋本鈴史氏によって、「室町物語『浄瑠璃姫物語』と「鉢かづき」」(『角屋研究』6号／一九九六年八月／財団法人 角屋保存会)に影印・翻刻・解題が紹介された。奈良絵本が張り交ぜ屏風に改装されているが、上下冊分が揃っている)、石川透氏所蔵本(同氏「はちかづき・上」解題・翻刻)／『三田国文』25号／一九九七年三月／慶応大学。上冊だけである)、京都大学総合人間学部図書館所蔵本(『京都大学蔵 むろまちものがたり 10』(京都大学文学部国語国文学研究室編集／二〇〇一年／臨川書店)に影印・翻刻・解題が紹介された。解題は金光桂子氏。下冊だけである)などがある。御巫本をはじめとするこれらの伝本は、注(3)松本氏の目録では、B系統とされる。

- (5) 注(4)の三氏ともにこの見解にたつ。
 (6) 松本隆信氏「御伽草子本の本文について(二)——鉢か

づきの草子」(『斯道文庫論集』第三輯/一九六四年十月/慶応大学)、同氏「民間説話系の室町時代物語―「鉢かづき」」「伊豆箱根の本地」―(『斯道文庫論集』第七輯/一九七九年十月/慶応大学)。両論文ともに、同氏『中世庶民文学 物語草子のゆくへ』(一九九六年/汲古書院)に再録されている。秋本氏、石川氏、金光氏も、松本氏の論を継承する。

(7) 注(4) 金光氏解題。

(8) 翻刻は新編日本古典文学全集「御伽草子集」(小学館)を使用。

(9) 注(7)に同じ。

(10) 注(4) 秋本氏解題。

(11) 注(4) 秋本氏の翻刻から、該当部分を引用する。引用文内の「」は、角屋本で意味が通らない部分を、秋本氏が御巫本によって補った箇所である。①「閑白」邸で能力を尋ねられたときに、「鉢かづき」が答える部分では、能力を具体的に述べる箇所を欠く。「か、る、みとは、なりて、候へとも、わ【かち、は、にて、あひかしつき、候しほとは、さうしをなかめ、ひわをひき候しかとも】なにを、のうに、する、とも、しらす、候へは」(十九ウ)。②「中将」が「鉢かづき」を寵愛することを聞いた女房たちが、それを非難する場面で、坂上田村麻呂が「あくたま」に心を掛けたの故事の一部が欠ける。

「むかし、たむらの、しやうくんと、かや、こそ、につほんの、めいしや【うくんと、あり】なから、あくたま【といふ女に、心をかけ、一人の、めいし】やう、くんを、まふけ、給ひけるとはつたへきけ」(二十二ウ)。③淀川へ捨てられた「鉢かづき」を捜し当てる場面では、発見の記述を欠く。また、この箇所は単語単位の誤脱も多い。「川のむかひに、つほかさ、きたる、もの見え、ける、ほとに、見ゆる、ものは、なにものぞ、いそき【みてまいれとて、つかはされければ、かのはちかつきなり、おほきよろこひ、川をわ】たして、御まへに、まいらせ【ければ、御こ】とはも、いたさす、なみたに【むせひ】て、袖を、かほに、あて、なき、か【なし】みたまへり、いそき、いしやう【を】ぬき、かへさせて、めしくし、御のほりありける」(二十六ウ)。④「鉢」から出る財宝を列挙する部分では、宝物の一部を欠く。「八十二の、【か】けこ、かうのか、み、五しやくの、かつら、かけおひ、十二ひとへの、からきぬ、きん【らんの、とのい物、こか】ねの【たちはな、しろかねの、ほんてうし、るりのさかつき】めなうの、いしのおひ」(以下略。二十九ウ)。⑤「閑白」が「嫁くらべ」を下知する場面では、子息「中将」への嘲笑を命じる箇所を欠く。「中将ともに、めんくんに【かほまもり給へとそ、けちせられける】」(三十ウ)。⑥「鉢かづき」と「中将」が「嫁くらべ」の

座に出る場面で、待ち受ける人々と「中将」の装束の描写の一部を欠く。「御所中には、てんかの、まんところをはしめて、一もんの、けつけい、うんかく、なみいて、はちかつきを、みん」と、またせ給ふ所に、そのほか、きせん上下、わらひまふけて、まちかけたり、中将殿は、からのかふりに、六ゐのからきぬに、めなう」のいしのおひ・たんせつの・したうわはいて」(三十二オ)。(7)「嫁くらべ」の座での「鉢かづき」の美しさに驚嘆する人々の具体名が欠ける。「ひめ君の、しうとめこ、せんの一たりの、さになをらせ給ひける」(三十二ウ)／(白紙・十五)(三十三オ)／「きたのまんところ、くわんはく殿を、はしめ」たまひて、これほど、うつくしき、かりける、ひ【め君】は、なにとて、はち【をは】、かつ【き、御】みをは、やつしたまひける【そや】(三十三ウ)。

(12) 注(7)に同じ。

(13) 注(7)に同じ。

(14) 翻刻は『室町時代物語集 第三』(井上書店)を使用。

(15) 「鉢かづき」の誕生から、実母の死、父の再婚、継母に憎まれて京の「四条の辻」に捨てられる、都人に美貌を認められて養われるところまでが、上冊の内容である。下冊は、噂を聞いた「閨白」が、「鉢かづき」を邸に召すところから始まる。

(16) 注(6)「民間説話系の室町時代物語——「鉢かづき」

「伊豆箱根の本地」」。松本氏は、「決して巧みではないし、作者の教養、知識の程も知れる類のものが多くが、殊更に七五調の文を多く綴り、縁語、掛詞や譬喩的な形容句に技巧をこらすなど、修辞に力を注いでいるのが、この作品の著しい特徴である。そこには、この作品が民間伝承を素材にしているとしても、それを一篇の文芸作品に仕立てようとした作者の創作意識が露骨に現れていることを認めることができる」と言う。

(17) 松原秀江氏は、古写本『嚴島の本地』・丹緑本『三人法師』・奈良絵本『七草ひめ』・寛文刊本『子易物語』・正保刊本『西行物語』・奈良絵本『天地の本地』・刊本『しぐれ』・奈良絵本『一本菊』・古写本『小町双紙』・刊本『花子ものぐるひ』・寛文刊本『鶴の草子』・国立東京博物館本『鼠の草紙』などの例をあげ、「地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天・声聞・縁覚・菩薩、仏の十界はもとより、同じ有為転変の人の世に生まれても、決して同じではない人夫々の境遇、即ち、貴賤貧富の別や、「みめ」(古写本『嚴島の本地など』)のよしあし、知恵の有無や喜怒哀楽にいたるまで、それらは皆……己れ自身の心と行為がもたらした」前世の報いであり、因果であると考えられていた、と説明する(『観音利生譚「はちかづき」論』方便力としての「鉢」の意味を中心に)。同氏『薄雪物語と御伽草子・仮名草子』。

(18) 注(16)に同じ。

(19) 長濱貴子氏は、「長谷観音」の「靈驗譚」として分類されている『鉢かづき』では、それは物語展開の方便であり、宗教的要素は希薄であったと考えることができる」と言う(水田潤「御伽草子」の構図―『物くさ太郎』『鉢かづき』―)／同氏編著『近世文芸論―ロマネスクと変容―』／一九九五年／翰林書房)。これは水田氏の論考のなかで、同氏の指導による長濱氏の卒業論文『鉢かづき』(渋川版)の特質と史的意義』の一部として紹介されている。

(20) 島内景二氏『鉢かづき―如意宝の両義性―』(同氏『御伽草子の精神史』／一九八八年／ペリかん社)。

(21) 注(20)に同じ。

(22) 鈴木弘道氏は、「枕」は寝具であるから、姫にとつては、自分と供養する相手である恋人宰相の君を想うためには重宝なものであり、かつまた、古来、宗教的・呪術的な作用があると信じられ、姫は、「枕」に宰相の君の生命が宿っていると考えることができたに違いない」と言う。しかし、氏は「笛」については、男根の象徴であり、また、「神おろしの楽器としての靈力」を持つているために取り上げられたと考える(『御伽草子「鉢かづき」の変装趣向とその原拠」／『奈良大学紀要』4号／一九七五年十二月／奈良大学)。

(とみだ・なるみ 立命館大学非常勤講師)